

# 弥生時代高地性集落における可視領域の検討

—近畿地方を例として—

宇佐美 智 之\*

## I. はじめに

日本列島の弥生時代には、中国・朝鮮半島との交流を基礎としつつ水稻農耕が本格化し、西日本を中心に拡大・定着した。そのため弥生集落の立地のあり方としては、水稻農耕に適した土地（低地）やその周辺が選択される傾向がつよいものと一般的に考えられる。しかしその中で、そうした土地から離れ、山・丘陵上に集落を営む例が各地で現れてくる。それらの一部または全部を、高地性集落と呼ぶ。

高地性集落に関してはこれまでに多くの研究の蓄積があるが、その本格的な始まりは、1950年代の小野忠熙による考古地理学研究に求められる。小野は山口県島田川流域における丘陵上の遺跡群を調査する中で、防御的機能を備えた集落の発達を捉え、それが中国史書にみる倭国の動乱と関わるものと考えた<sup>1)</sup>。その後、丘陵上での集落の出現については軍事・防御面だけでなく畑作などを含めた多元的な要因を想定したが<sup>2)</sup>、高所の集落固有の機能を探る方向性が示されたことは研

究史上重要であったといえる。さらに、1970年代には小野を中心に全国規模での調査研究が推進され<sup>3)</sup>、それを通じて高地性集落研究はひとつの到達点を迎えたのである。

一方、弥生時代の実年代観が見直され高地性集落と動乱情勢とが単純には結びつかなくなるとともに、全国的に色々な実例が明らかになってきたことで、その性格理解においては、それまで主流であった軍事・防御を特に重視する考えから離れ、多様な見解が示されるようになってきている。小野の最初の試み以後蓄積されてきた多数の調査研究成果を基礎に、様々な観点から高地性集落の実態についての検証・整理を進め、議論を一層深めていく必要があるといえる。

本稿では、この課題に対する基礎作業のひとつとして、高地性集落における可視領域の問題を取り上げ、GISの分析技術を活用しつつ考察を加えることにしたい。

## II. 研究の背景と目的

小野忠熙により本格的研究が開始されて以

\* 立命館大学文学部地域研究学域

キーワード：高地性集落、可視領域分析、GIS（地理情報システム）、弥生時代

Key words：Upland Settlement, Viewshed Analysis, GIS (Geographical Information Systems), Yayoi Period

後、高地性集落の認定と類型化の作業が進められた。小野は狭義の高地性集落、広義の高地性集落という区分を示し<sup>4)</sup>、都出比呂志はA・Bタイプという二類型を設定した<sup>5)</sup>。また石野博信は山稜性・丘陵性<sup>6)</sup>、寺沢薫はI・II類型<sup>7)</sup>を提示している。

代表例として都出が示した二類型を挙げると、Aタイプとは急峻な山頂や尾根上にあって平地（可耕地）との距離が遠いもの、Bタイプとは標高60m・比高30m前後の丘陵上にあるものとされる。なお小野、石野、寺沢による類型設定もこれと大きくは対応したものである。

こうした類型化は各地の高地性集落を整理する上で有効であったと考えるが、A・Bタイプの中間的位相を示すものもあり、また特にBタイプに関しては、低地集落との違いが必ずしも明確でなく、各地域の地形環境の違いまたは研究者ごとの認識の仕方によって、そもそも高地性集落とみなすか否かの判断がわかれやすいところもあった。

他方、都出は便宜的な二類型化とは別に、「見通しのきく高所に居を構えて「見張る」機能こそが高地性集落に固有のものと言い得る」<sup>8)</sup>と述べた。この指摘は、多様かつ複雑な共存・競合関係が生じた弥生社会の中で、領域や水陸交通の要所をめぐる情報の収集・伝達などに対し高い能力を発揮できる特性を捉えるべきとしたものであるが、実際に都出はこの理解によりつつ、淀川流域を例に、高地性集落を中心とする監視・通信網の存在を実証的に論じた<sup>9)</sup>。

このような高地性集落の視認性や立地特性への着目は、その出現過程や要因を解明していくための切り口のひとつとして重要な意味をもつと考えられる。ただし、そこでは各々

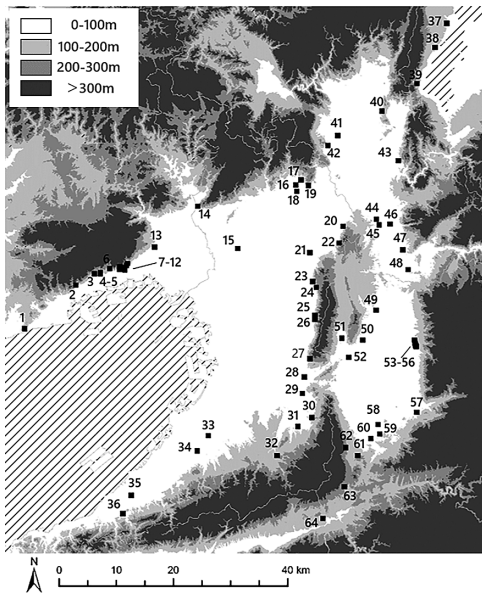
の可視領域の広がりや違いが具体的に議論されるには至らなかった。また、都出は上述の指摘とあわせ、Bタイプにも一定の視認性（「見張る」機能）が備わっていることに触れつつ、それがAタイプの集落に特に顕著であるという点を強調したが<sup>10)</sup>、各集落（類型）における可視領域の検証が十分になされていない以上、そうした理解に関しては注意も必要であろう。

一般的に、より高所に位置する集落（Aタイプ）の方がより遠く広い範囲を視認できることが想定されるが、周辺地勢や障壁となるものの有無によっては必ずしもこの限りでないこと、また例えば近傍にあっては高所であるほどに視認しにくくなる範囲が生じることなども予想されるところであろう。しかし都出の研究以後、大久保徹也の研究<sup>11)</sup>や筆者の研究<sup>12)</sup>などを除くと同様の観点から具体的検討が進められた例は少なく、こうした可視領域の問題に関する議論は深まっていなかった。現実の地理的環境や視認距離の条件などにもとづき、高地性集落における視認性の実態を検証・整理する必要があるといえよう。

そこで以下では、高地性集落について一定の調査研究の蓄積がある近畿地方（大阪湾沿岸、京都盆地、奈良盆地）を例に、GIS可視領域分析の利用を通じてこの作業を行うことにしたい。

### III. 対象と方法

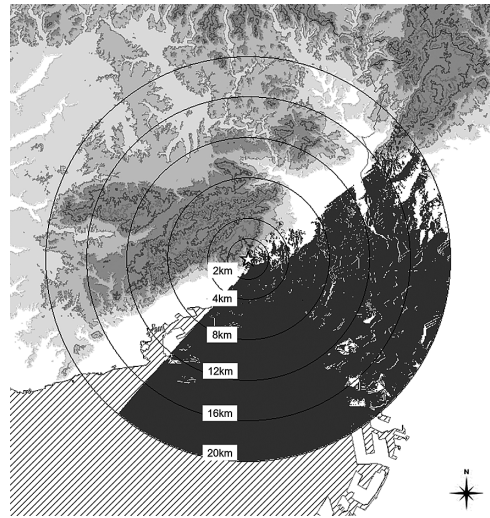
分析対象の選定に際して、大阪湾沿岸域では、①六甲山地南麓における森岡秀人および阿部敬生の研究<sup>13)</sup>、②大阪府域における駒井正明の研究<sup>14)</sup>、京都盆地では③伊賀高弘の研究<sup>15)</sup>、奈良盆地では④福家恭の研究<sup>16)</sup>



第1図 分析対象の位置（番号は第1表～第3表と対応。基盤地図情報（10mメッシュ）を使用し現地表面を表したもの）

の成果を主に参照し、各地の集落資料の確認・検討を進めた。その上で、資料状況が不十分なために遺跡内容の把握が難しいもの、また確認調査の結果、現在ではおよそ平坦地化している場所で以下の分析結果との照合をとることが特に難しいと判断したものは除外（保留）し、計64遺跡を取り上げた（第1図、第1表～第3表）。

なお、本対象範囲では、上記の各先行研究で扱われた遺跡としておよそ110例がある。ここに挙げた対象数はその6割程であり、この意味で本稿の検討は中間報告という位置づけが妥当である。ただし、各地域の主要な高地性集落を取り上げるとともに、様々な高さ（比高）<sup>17)</sup>に位置する集落をおおむね一定数ずつ抽出しえたため（比高20～40m:13例、40～60m:15例、60～80m:12例、80～100m:11例、100m以上:13例）、以下の



第2図 距離帯別の可視領域分析（芦屋市城山遺跡の例）

作業を通じて有意な結果を得ることは可能であると推定する。

分析方法としては、全対象でGIS可視領域分析<sup>18)</sup>を実施した上、視認距離に応じた可視領域の広がり方を把握するため、距離帯別に結果を整理することとする。ここでは各集落の標高（最高所）に1.5m（人の目の高さ）を加算した後、6つの距離設定（0-2km、2-4km、4-8km、8-12km、12-16km、16-20km）で平面上の可視領域面積を抽出し（第2図）、各距離帯における割合を算出する<sup>19)</sup>。なお、この結果を示す第1表では、各距離帯で上位10%に入る数値を濃色、上位30%に入る数値を淡色で表現している。

距離設定に関しては、考古遺跡からの可視領域を評価する場合に従来3～4kmが想定されることが多いといえるが<sup>20)</sup>、これを0-2km、2-4kmにわけた。また最大距離は大久保徹也の研究<sup>21)</sup>によりつつ20kmを設定し、4km～20kmまでを4km間隔で区分

した。ただし、これは 20 km 先の対象（移動集団や集落など）を常時視認できるという意味ではなく、天候などの諸条件に恵まれた場合の可能性を考慮したものである。「ノロシ実験」からは、軍防令の置烽条にみるような 20 km 以上先という遠方への視認性には

疑問が呈されたし<sup>22)</sup>、現実的な距離としては 13 km 程度以内を想定すべきかといった考えもある<sup>23)</sup>。条件次第で遠方への察知能力が働いた可能性は捨て去るべきでないと思われるが、この点は今後の検証に委ねられるところであり、本稿でもそれを加味しつつ結

第 1 表 分析対象および可視領域分析の結果：大阪湾沿岸域（兵庫県・大阪府の一部）

所在地	No	遺跡名	大別時期	標高 (m)	比高 (m)	0-2km (%)	2-4km (%)	4-8km (%)	8-12km (%)	12-16km (%)	16-20km (%)
兵庫県神戸市	1	鉢伏山	中・後期	240	235	40.6	62.6	61.7	63.0	60.8	56.6
兵庫県神戸市	2	布引丸山	中・後期	140	80	36.6	37.3	39.0	40.2	40.8	40.0
兵庫県神戸市	3	伯母野山	中・後期	180	90	46.0	35.9	38.3	40.1	40.6	40.1
兵庫県神戸市	4	滝ノ奥	中期	150	90	34.3	28.7	33.7	35.8	36.7	36.2
兵庫県神戸市	5	桜ヶ丘 B	中・後期	120	60	53.6	42.6	40.6	41.3	41.0	40.5
兵庫県神戸市	6	荒神山	中・後期	220	160	42.1	39.8	37.8	36.8	36.5	36.3
兵庫県神戸市	7	金鳥山	中・後期	200	180	27.0	34.8	41.3	40.5	41.2	41.0
兵庫県神戸市	8	保久良神社	中・後期	180	150	38.3	39.9	42.8	41.6	41.4	41.1
兵庫県神戸市	9	東山	中・後期	230	150	29.3	45.3	48.6	50.5	49.7	47.7
兵庫県神戸市	10	坂下山	中期	90	65	42.5	41.0	47.1	45.6	44.8	44.2
兵庫県芦屋市	11	会下山	中・後期	200	160	34.4	36.6	39.3	42.9	42.1	40.5
兵庫県芦屋市	12	城山	中・後期	220	180	49.1	39.2	41.9	45.9	45.6	43.7
兵庫県西宮市	13	五ヶ山	中・後期	110	80	55.7	62.9	54.1	47.7	40.7	35.3
大阪府池田市	14	愛宕神社	中・後期	210	180	31.1	38.1	31.3	26.2	28.6	31.1
大阪府吹田市	15	垂水	中・後期	55	50	61.4	53.3	52.2	56.0	40.8	31.2
大阪府高槻市	16	古曽部・芝谷	後期	90	60	40.6	37.3	31.7	20.9	12.6	10.0
大阪府高槻市	17	成合	中・後期	80	30	14.3	3.6	4.4	1.6	1.6	0.2
大阪府高槻市	18	天神山	中期	50	30	49.4	44.9	33.3	17.5	8.6	8.7
大阪府高槻市	19	萩ノ庄	後期	110	90	30.8	34.6	29.1	21.3	12.3	9.3
大阪府枚方市	20	津田城古城地区	中期	90	50	37.1	29.6	17.6	20.4	23.2	16.7
大阪府寝屋川市	21	太秦	中・後期	60	40	32.4	39.5	39.7	32.9	22.9	18.9
大阪府交野市	22	南山	後期	200	150	33.9	36.5	23.2	35.3	27.4	19.7
大阪府大東市	23	寺川堂山	後期	80	65	46.5	45.7	42.6	40.8	30.0	23.1
大阪府大東市	24	国見	後期	200	170	45.8	44.1	41.9	41.9	36.8	31.3
大阪府東大阪市	25	山畑	中・後期	80	60	45.4	40.3	42.5	39.7	28.3	29.2
大阪府東大阪市	26	岩滝山	後期	90	60	38.3	37.7	40.3	38.5	27.5	28.5
大阪府柏原市	27	高尾山	後期	270	240	34.1	48.4	44.4	43.9	37.7	33.7
大阪府柏原市	28	玉手山	後期	90	60	62.9	47.8	29.7	27.6	18.8	17.6
大阪府羽曳野市	29	駒ヶ谷	後期	80	35	44.9	36.7	20.2	16.1	14.2	12.2
大阪府南河内郡河南町	30	東山	後期	160	120	38.3	25.1	7.9	2.7	2.3	2.9
大阪府南河内郡河南町	31	寛弘寺	後期	100	30	60.0	40.1	12.2	3.8	5.8	4.3
大阪府河内長野市	32	大師山	後期	200	90	22.9	9.3	2.0	0.3	0.1	0.9
大阪府和泉市	33	観音寺山	後期	70	40	65.6	30.7	28.3	30.8	32.3	33.1
大阪府岸和田市	34	どぞく	中・後期	75	35	46.1	26.3	28.3	34.5	35.4	33.8
大阪府泉南市	35	新家オドリ山	中・後期	40	30	43.2	34.9	37.1	36.9	39.8	37.4
大阪府泉南市	36	滑瀬	中・後期	70	35	21.6	9.7	12.6	15.0	15.8	16.6

果の記述においては8-12 km 帯までを主体とする。

なお、以下では必要に応じて、0-2 km、2-4 km を近距離帯、4-8 km、8-12 km を中距離帯、12-16 km、16-20 km を遠距離帯と呼びわけらる。

## IV. 分析結果の整理と検討

### 1. 分析結果の整理(第1表～第3表、第3図)

対象集落における距離帯別の可視領域の広さ、ならびに各距離帯の上位10%（濃色）、30%（淡色）を表現した第1～3表について整理し、検討を加える。

まず、第1表に示す六甲山地南麓（兵庫県

第2表 分析対象および可視領域分析の結果：京都盆地（京都府・滋賀県の一部）

所在地	No	遺跡名	大別時期	標高(m)	比高(m)	0-2km(%)	2-4km(%)	4-8km(%)	8-12km(%)	12-16km(%)	16-20km(%)
滋賀県大津市	37	春日山	中期	150	65	47.2	44.9	48.6	42.0	37.6	16.7
滋賀県大津市	38	高峯	中期	160	80	54.2	51.5	45.2	39.0	24.4	17.2
滋賀県大津市	39	部屋ヶ谷	後期	190	90	39.6	36.1	29.2	22.6	16.3	9.5
京都府京都市	40	南日吉町	後期	90	45	26.4	32.8	35.4	18.2	7.6	2.1
京都府向日市	41	北山	中・後期	55	40	75.5	60.0	49.6	27.3	10.6	3.8
京都府長岡京市	42	長法寺谷山	後期	75	45	39.5	31.4	28.9	27.1	14.0	4.0
京都府宇治市	43	羽戸山	後期	70	40	34.0	24.2	16.4	15.5	6.1	2.4
京都府京田辺市	44	興戸	中・後期	90	60	35.1	30.4	17.0	7.2	7.7	5.7
京都府京田辺市	45	田辺天神山	後期	80	50	48.6	39.6	21.2	8.8	8.0	6.8
京都府京田辺市	46	飯岡	後期	70	40	81.7	48.3	19.8	9.9	7.0	6.9
京都府木津川市	47	椿井	中・後期	60	30	38.6	35.3	9.3	1.5	2.0	1.0
京都府木津川市	48	木津城山	後期	100	60	52.7	36.4	16.5	6.1	4.3	2.1

第3表 分析対象および可視領域分析の結果：奈良盆地（奈良県の一部）

所在地	No	遺跡名	大別時期	標高(m)	比高(m)	0-2km(%)	2-4km(%)	4-8km(%)	8-12km(%)	12-16km(%)	16-20km(%)
奈良県奈良市	49	六条山	後期	100	25	31.4	37.4	27.6	14.4	11.6	8.9
奈良県生駒郡斑鳩町	50	三井岡原	後期	75	20	47.2	35.5	32.6	27.0	10.4	4.8
奈良県生駒郡平群町	51	廿日山	中・後期	90	30	47.1	8.8	2.3	1.2	5.1	2.3
奈良県北葛城郡王寺町	52	舟戸・西岡	後期	70	40	56.6	36.5	28.1	29.9	15.2	5.4
奈良県天理市	53	東大寺山	後期	130	55	46.3	39.6	44.3	28.6	14.7	10.9
奈良県天理市	54	平尾山	後期	100	30	27.3	29.2	31.7	19.9	10.1	8.7
奈良県天理市	55	別所裏山	後期	110	40	36.9	32.7	31.9	23.0	12.4	7.6
奈良県天理市	56	豊田山	後期	110	35	26.9	25.6	24.7	23.3	13.0	9.8
奈良県桜井市	57	桜井公園	後期	130	50	62.2	43.2	24.1	21.9	15.9	8.9
奈良県橿原市	58	忌部山	後期	90	40	76.1	55.4	41.6	20.6	12.3	7.0
奈良県橿原市	59	上ノ山	後期	140	80	49.8	40.2	36.8	19.0	10.5	8.1
奈良県橿原市	60	本馬丘	後期	140	60	74.2	49.6	34.2	17.8	12.2	9.5
奈良県御所市	61	巨勢山境谷	後期	160	80	42.9	31.4	12.6	10.6	10.7	10.0
奈良県御所市	62	吐田平	後期	300	140	26.4	30.4	17.8	15.1	16.3	15.3
奈良県五條市	63	引ノ山	後期	240	80	31.6	10.8	6.7	4.8	2.9	2.7
奈良県五條市	64	釜窪丈六堂	後期	160	70	27.0	13.6	7.0	1.4	0.4	0.3



神戸市・芦屋市域など）は、学史上著名な会下山遺跡などを含め高標高・比高の高地性集落（Aタイプ）が多く分布する地域であり、上位10%、30%に入ってくるものが非常に目立っている（第1表）。ただし、その主体は中・遠距離帯にあるという点に重要な特徴があり、近距離帯に関しては、必ずしも数値的に低いわけではないが、とりわけ上位10%に入るような集落は3例程にとどまる。

これに対し、それ以東の地域（大阪府域）では、中・遠距離帯で上位10%に入るものは存在しない一方、一部の集落が近距離帯における上位10%に含まれる。同時にそれらの集落の比高が40～60m程（Bタイプ相当）であることは特に注意される点である。

これと同様の状況を、第2・3表に示す京都盆地、奈良盆地においても確認することができる。近距離帯で上位10%に入る集落が複数認められ、それらの多くはやはり比高40～60m程に位置するものである。すなわち、そのような低丘陵上の集落（Bタイプ相当）にあっても、近距離帯では、上述した六甲山地南麓の高標高・比高の集落（Aタイプ相当）に匹敵ないしそれらを上回る例が少なくないということである。

加えて、その中には、中距離帯でも上位10%または30%に入るものが一部存在することが注目されるであろう。他方、遠距離帯について確認すると、上位30%以内に入るものの数はきわめて限定的となっている。この点とも関連して、京都盆地や奈良盆地では、8-12km帯付近を境に数値が大きく低下する集落が多くみられる。この理由のひとつには、盆地地形ではいかに展望の開けた場所でも、12km、16km以上先への見通しが遮られやすいということがあるかもしれない。

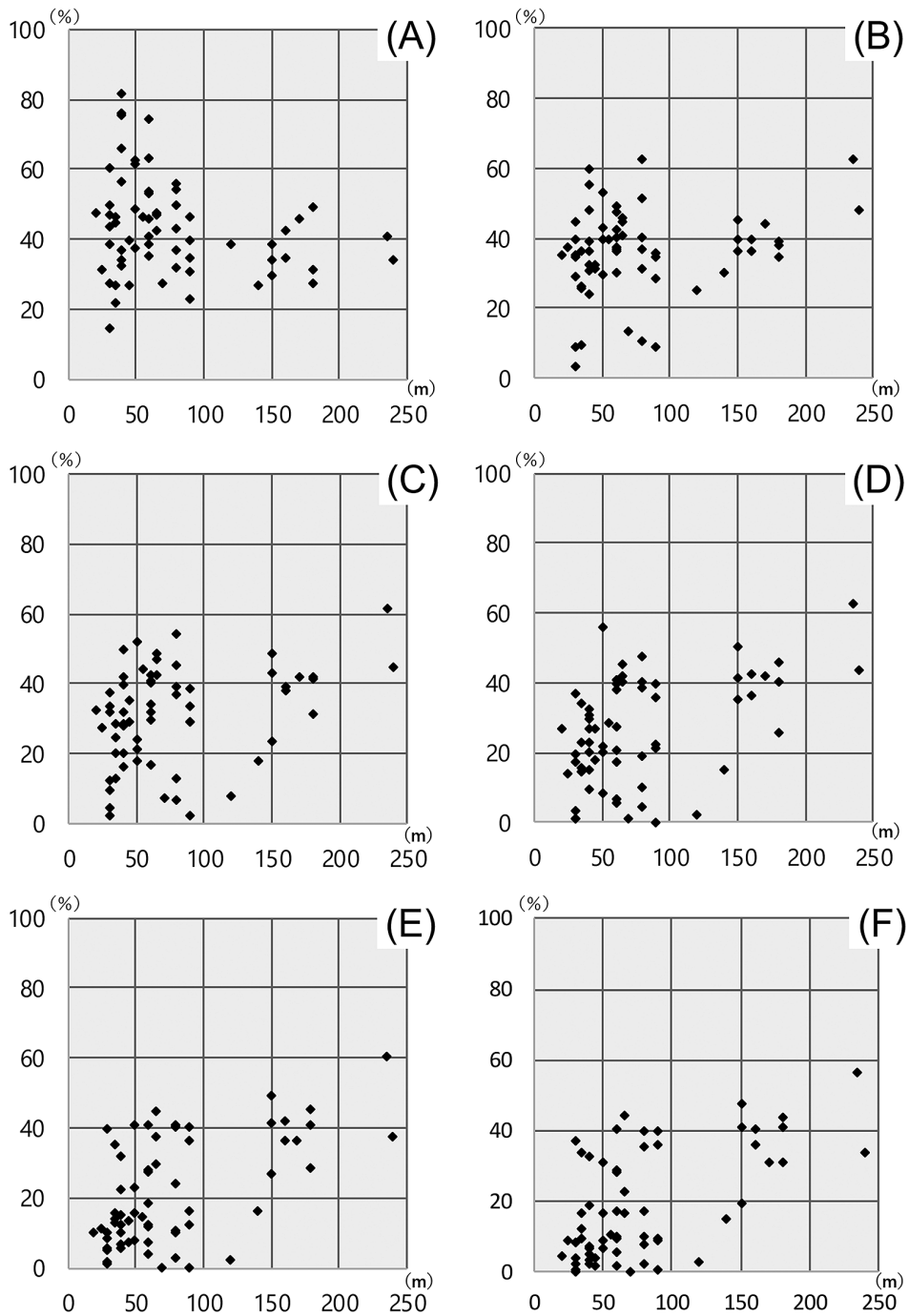
以上のような結果の確認とあわせて、比高と距離帯別可視領域の広さとの対応関係を表現した第3図から、全体的傾向を整理しておきたい。

0-2km帯（A）：この距離帯における特徴としては、上で確認した通り比高40～60m程に位置する集落の一部が卓越した可視領域をもつことが挙げられる。一方、この比高の可視領域については分布のばらつきが大きく、可視領域80%に及ぶものから20%程度にとどまるものまでが存在する。これに対し、比高150m前後を超える高比高集落は可視領域40%前後にある程度まとまって分布することが興味深い点である。

2-4km帯（B）：この距離帯では、可視領域60%を超えるような突出した数値を示すものは少ないが、やはり比高40～60m程に位置する集落の一部に良好な可視領域をもつものが一定数存在する。また、0-2km帯（A）と比べて、可視領域40%前後に分布が集中する傾向がつかいことがわかる。

4-8km帯（C）：この距離帯にみる傾向は、2-4km帯（B）とある程度対応するものであるが、特に比高50m程度以下の集落で、可視領域の数値が低下するものが少なくない。この距離帯ないし次の8-12km帯（D）において、高比高集落の可視領域との差が開くものが一定数出てくるということになる。

8-12km帯（D）：この距離帯では、分布の状況において2-4km帯（B）や4-8km帯（C）との違いが比較的明瞭に現れる。上で着目した比高40～60m程に位置する集落については、一部が可視領域40%前後を維持する一方で、20%前後に分布が集中する傾向が生じていることがみてとれる。他方、比高150m以上の高比高集落は近距離帯の結



第3図 可視領域と比高の関係（横軸：比高（m）、縦軸：可視領域の広さ（%））  
 (A : 0-2 km 帯、B : 2-4 km 帯、C : 4-8 km 帯、D : 8-12 km 帯、E : 12-16 km 帯、F : 16-20 km 帯)

果と大きくは変わらず、可視領域 40%前後にまとまりやすい。

12-16 km 帯 (E) および 16-20 km 帯 (F): 遠距離帯にあたる 12-16 km 帯 (E)、16-20 km 帯 (F) ではほぼ同様の傾向が認められる。比高 100 m 以下の範囲をみると、一部が可視領域 40%程度を確保し、それ以外の多くは 20%前後ないしそれ以下の範囲にまとまっている。単純な広さという点でいえば、周囲への視認能力が相対的に低いものが多数を占めることを示している。これに対し、比高 150 m 以上の高比高集落の分布は近・中距離帯のそれと大きな差がない。各距離帯の範囲を広角にバランスよく視認できるところに、重要な特性を評価できるであろう。

## 2. 距離帯別にみた近畿地方の高地性集落の可視領域

以上の作業結果の主要な点をまとめ、若干の考察を加えることにしたい。

距離帯別の可視領域の抽出・整理作業から、いくつかの傾向と特徴を読み取ることができる。最も注目できる点のひとつは、周囲への視認（情報伝達）能力においては高標高・比高の集落（A タイプ相当）が顕著とみる従来の理解に対し、近距離帯（0-2 km、2-4 km）という限定的な範囲で捉えた場合、比高 40 ~ 60 m 程の相対的に低い位置の集落（B タイプ相当）に全体の上位を占めるものが多いということである（第 1 表～第 3 表）。全体的傾向においても、同様に近距離帯内では後者（B タイプ相当）は可視領域 30 ~ 50%に主に分布し、前者（A タイプ相当）のそれにも大きくは劣らない状況が把握される（第 3 図）。加えて、中距離帯（4-8 km、8-12 km）という範囲でみても、後者のうち複数のものが上位に入る、あるいは上位のものに匹敵す

ることは評価してよい点であろう。

このように距離帯別にみると、立地場所が高いほど良好な視認性を得るとは必ずしもいえないことが確認されるとともに、従来 B タイプと一括して理解されてきた高地性集落の中にも、特に近・中距離帯内では高い水準の視認性をもつものが複数存在したことがわかる。視認の目的や対象位置に応じた適切な立地場所選択により、相対的に低い立地場所であっても、視認・情報伝達に関わる能力は A タイプとも遜色なく発揮できた場合も少なくなかったと推測したい。この点は今後のさらなる検証を要するが、A・B タイプという立地条件をもとにした従来の高地性集落の枠組みに機能差や優劣を安易に想定することは適切でなく、個別の実態に応じた評価を与える必要があるということが確認されるのである。

## V. 結語

以上、近畿地方を例に、弥生時代高地性集落の可視領域について検討を加えた。

水稻農耕を基盤とする社会が成熟する中では、様々な要因で競合・共存が生じつつ集団関係が著しく複雑化・多様化して、領域や水陸交通の要所を視認すること、あるいは必要な情報を集約・伝達することの重要性は相対的に高まったものと想定される<sup>24)</sup>。高地性集落の出現・展開は、そのような社会動向に深く関係する場合が多かったとみられるものである。こうした理解にもとづき本稿では、GIS の分析技術を活用しつつ高地性集落における可視領域の実態を検証・整理し、その成立過程や社会的背景を議論する上での手掛かりを得ようと試みた。

設定距離帯ごとの可視領域の抽出・整理作



業を通じて、Aタイプ（または狭義の高地性集落）相当の高標高・比高の集落が各距離帯で優れた視認性を発揮することが確認された一方、相対的に低い立地をとるBタイプ（または広義の高地性集落）相当の集落にあっては、距離帯によっては卓越した視認性をもつものが複数存在することが明確化した。特に8 km程度（中距離帯）以内の範囲で可視領域の広がり进行评估する場合、Aタイプに必ずしも劣らない水準を示すものも決して少なく、さらに一部にはそれを上回る視認性を獲得しえたものも認められる。その背景には、時々の社会状況や独自の地域環境の中で、視認の目的・対象に応じて緻密な立地場所の計画・選択がなされたことがあったと推測したい。この点について、良好に調査が実施された小地域に範囲を絞りつつ、詳細な立地動態分析や地形復元を通じて考察を深めることが今後の課題である。

なお、本稿で最初に言及した、小野忠熙が調査を行った山口県島田川流域遺跡群（標高50 m程）は、まさに上で着目したBタイプにあたる高地性集落である。しかし、乗安和二三が指摘した通り、Aタイプにあたる、数百mもの高さの「典型的」な高地性集落がその後各地で発見されていくにつれ、その存在が学史のかたに埋没してしまった観は否めない<sup>25)</sup>。他方、本稿では、そのBタイプに一括されてきた高地性集落の中にも際立った視認の特性をもつものが多く存在し、その位置づけにおいて再評価しうる面があることを示した。この立場からは、高地性集落研究の原点である小野の取り組みは学術的価値を失うどころか、改めてその着眼や問題提起の意義を捉える必要があるようにも思われるのである<sup>26)</sup>。

〔付記〕本稿の構想・内容に関わって、宇野隆夫氏、森岡秀人氏には大変有益な助言を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。また本稿は科学研究費補助金（研究代表者：森岡秀人、課題番号：20H01356）による研究成果の一部です。

## 注

- 1) 小野忠熙編（1953）『島田川：周防島田川流域の遺跡調査研究報告』、山口大学島田川遺跡学術調査団。
- 2) ①小野忠熙（1958）「弥生式集落の垂直的遷移現象に関する若干の問題」、人文地理、10(3)、15-32。②小野忠熙（1959）「瀬戸内地方における弥生式高地性村落とその機能」、考古学研究、6(2)、2-12。③小野忠熙（1984）『高地性集落論：その研究の歩み』、学生社。
- 3) 小野忠熙編（1979）『高地性集落跡の研究（資料編）』、学生社。
- 4) ①前掲2)、①。②前掲3)。
- 5) 都出比呂志（1974）「古墳出現前夜の集団関係：淀川水系を中心に」、考古学研究、20(4)、20-47。
- 6) 石野博信（1973）「3世紀の高城と水城」、古代学研究、68、1-9。
- 7) 寺沢薫（2014）「高地性集落論」、『弥生時代の年代と交流』、吉川弘文館、370-477。
- 8) 前掲5)。
- 9) 前掲5)。
- 10) 前掲5)。
- 11) 大久保徹也（2019）「〈遠見集落〉紫雲山遺跡 その機能と効力」、『紫雲山遺跡（三豊市埋蔵文化財発掘調査報告11）』、三豊市教育委員会、283-298。
- 12) 宇佐美智之（2021）「高地性集落の眺望：GIS眺望分析による弥生時代高地性集落の立地研究」、立命館文学、672、181-197。
- 13) ①森岡秀人（1981）「東六甲の高地性集落（上）」、古代学研究、96、1-19。②森岡秀人（1982）「東六甲の高地性集落（中）」、古代学研究、97、1-12。③阿部敦生（2013）「神戸市域における丘陵上集落について」、大和弥生文化の会『弥生研究の群像』、305-318。
- 14) 駒井正明（2001）「高地に作られたムラ」、大阪府立弥生文化博物館編『弥生時代の集落』、学生社、58-69。
- 15) 伊賀高弘（2001）「南山城地域の弥生高地性集落についての一試考」、京都府埋蔵文化財論集、4、41-52。
- 16) 福家恭（2012）「奈良県の高地性集落：近年の調査と研究を踏まえて」、みずほ、43、2-16。

- 17) 遺跡立地場所における平地（可耕地）からの高さを指す。ここでは各先行研究（主に注3）、13）～16）文献）で示された数値を参考とし、必要に応じて補正を行った。この比高の抽出・評価については意見がわかれる場合があるが、詳細は別の機会に検討することにした。
- 18) この分析法の原理や活用例（特に考古学や考古地理学分野）については次の①を、また高地性集落研究での利用に関しては拙稿②、③を参照されたい。①宇野隆夫編（2006）『実践考古学 GIS: 先端技術で歴史空間を読む』、NTT 出版。②前掲 12）。③宇佐美智之（印刷中）「眺望分析の手法と高位集落の視界情報」、季刊考古学、157。
- 19) この分析に際しては、遺跡範囲内の最高所ないしそれに準ずる地点を立脚点（観測地点）とし、そこからの可視領域が最大値をとるようにした。ただし遺跡範囲は暫定的なもので、さらに立脚点の若干の移動でその広さも変わる場合があることに注意を要する。この意味では、個別の結果を厳密に扱うことには限界も生じてくるが、視認性の傾向の把握・比較を目的とした利用では一定の有効性をもつと考える（注 18）などの文献を参照）。
- 20) 例えば次の文献を参照されたい。津村宏臣・小林謙一・坂口隆・建石徹・西本豊弘（2002）「遺跡分布の評価とセツルメントシステムの予測：縄文集落の生態論（2）」、動物考古学、18、1-37。
- 21) 前掲 11）。
- 22) 「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会編（1997）『烽の道』、青木書店。
- 23) 前掲 11）。
- 24) 宇野隆夫（2006）「眺望の日本列島史」、宇野隆夫編『実践考古学 GIS：先端技術で歴史空間を読む』、NTT 出版、165-180。
- 25) 乗安和二三（1993）「島田川流域と高地性集落」、『考古学の世界：古代を科学する（第4巻）』、ぎょうせい、222-223。
- 26) 小野忠熙の高地性集落研究の歩みや功績については次の文献を参照されたい。森岡秀人（2019）「高地性集落研究のパイオニア、小野忠熙先生の逝去を悼む」、古代文化、71(1)、118-121。